



## ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十一号

2024/1/4 発行

題字：高橋弘美

年明け早々地震やら火災やらで、今年もなにやら大変な一年になりそうだが、わたしのほうでもどうやら大変な一年になりそうである。

長年つきあってきた子宮筋腫がいよいよ大きくなってきて、またぞろ手術ということになりそうな勢いなのがひとつと、これは元旦に電撃的な発表があったばかりでわたし自身まだにわかに信じられないているのだが、どうやら弟が結婚するらしいのである。

この衝撃がもう新年早々にわたしを打ちのめしてしまって、現在どうにもとりとめのない感情にとらわれてしまっているのだけれども、ともかくいまこのことでわたしは頭がいっぱいで、このご挨拶の項にもほんとうは全然別のことを書こうとしていたのだが、もうそれどころでなくなってしまった。今年はこの一件にかかりきりになりそうな予感がする。そしてこれからお読みいただく「妻を求めて」なる随筆のような小説のようなものを、結婚の発表を受ける直前に自分が書いていたのだと思うと、なんだか不思議な気がするのである。これらのことが自分になにを迫っているのか、考える一年にしたいと思う。

今号の内容

妻を求めて

妻を求めて

ある冷えこんだ日の朝、ようやく日が昇って明るくなったので、父が外へ出てなんとなく家の周りを歩いてみると、前日の終わりに窓の脇に立っかけておいた窓拭き用のワイパーがなくなっているのに気がついた。長い柄の先端に横向きにブラシのついたごく普通のワイパーで、父が年末の大掃除のためにホームセンターから買ってきたばかりの品であったが、父が不審に思いながらふと地面に目を落とすと、そのあたりにもつた雪の上に、小さな生き物の足跡がいつぱいついていているのである。

父はその足跡を目で追いかけたが、足跡の横になにかを引きずったような細い跡が一緒にくっついて、家の裏手のほうへずっと続いていた。こいつはひよつとすると、この生き物めがワイパーをどこかへ持ち去りおったなと父はピンときて、その足跡を追いかけはじめた。

数日前にどつと雪が降り、足首ほどの高さまで積もっていたが、前日の夜はかなり冷えこんだお

かげで雪は少しも降らず、その生き物の足跡は古い雪の上に鮮明に残っていた。家の裏手には小屋があり、その小屋の裏には細い水路をはさんで農道が通っていて、その農道のさらに向こうはまた水路をはさんでずっと田んぼが続いている。小さな盗人は長いものを引きずりながら、小屋の裏へ回り農道へ出て、長物をくわえたまま水路を飛び越え（！）、田んぼの先まで歩いて行ったらしかった。しよることなしに父も長靴を履いたまま水路を飛び越え、人さまの家の田んぼへ侵入して、くせ者の足跡を追った。歩を進めるたびに雪に足をとられ、追跡は難儀というほどではないがくたびれる仕事には違いなかった。父は雪の中を数百メートルも追っかけて行って、ようやく田んぼの真ん中に置き去りにされたワイパーを見つけた。

朝食の席で父はこの追跡譚を持ち出し、われわれ一家は、その泥棒はいつたいいかなる生き物であったかということをまず盛んに議論した。タヌキカムジナであろうというのが父の意見であった。イタチという可能性もあるが、イタチはあのよう

な長い柄をくわえて歩き回るような顎は持っているというのである。しかしわたしはイタチではないかと思った。ムジナは冬眠するし、タヌキはあまり人家のほうへは出てこない。一方、イタチは夜行性でいかに夜のうちにそうした

たずらをしそうだし、冬眠はしないし人里まで平気で出張してくる凶々しきがあり、ニワトリなど丸ごと食ってしまうからには顎も丈夫であるに違いないと思われたのである。

続いて議論は、そのワイパーを持ち去ったやつはいったいなにを考えておったのかということに移った。父が云うには、これはどう考えても大馬鹿者の仕業だというのである。いかに思慮浅き動物といえども、あのようものを引きずって一口近くも歩き回ったあげく、ポトリと落としていなくなるというのは、まったく理由がわからぬし筋も通らぬし、なにを考えているものやら理解に苦しむ。

これはまことにその通りで、わたしも母もその動物の動機や気持ちなるものはどう頭をひねっても理解できそうになかった。カラスが光り物をためこむように、その生き物特有のなにか不思議な性癖のようなものがあって、その発露ではないかという説、単に人一倍好奇心旺盛な個体だったのではないかという説、巣作りだとかなかのため

に目的をもって持ち去ったのではないかという説など、さまざま説が唱えられたが、どれもそうといえばそうかもしれぬがいまひとつピンとこないという具合で、結局よくわからぬ、アホな生き物もいたものだということ話が終わりかけたころ、父がふと冗談めかして、そうであれば妻に逃

げられた個体で、ブラシの部分の部分が妻の毛触りにでも似ていたのであろう、それで妻を思い出して懐かしくなり、恋しくなって、独り寝の無聊に耐えかねて思わずそれを持ち出したのではあるまいかと云い出した。

これは単なる冗談であったが、どうもその冗談の中に案外真理がひそんでいるというたぐいの冗談に聞こえ、わたしはすっかり考えこんでしまった。そこでしばらく考えてから外へ出て、父の云っていた足跡を自分も追いかけはじめた。

それは居間の窓のところから、裏の田んぼめがけてずっと続いていった。一番右端にその生き物の足跡があり、その横にワイパーの柄を引きずってできた細いすじが一本引かれて続いており、そのさらに横に父の長靴の足跡が、大股にそれを追いかけていた。わたしはそのさらに横を、足跡を見つめながら歩いていったが、動物の足跡に多少の研鑽を積んでいたわたくしの目には、それはやはりイタチの足跡、それもオスのイタチの足跡であるように見受けられた。イタチというのは雌雄の体格差が大きい生き物で、オスの足跡は猫のものほどもあるが、メスのはそれよりふた回りも小さい、ひどく頼りないようなものである。

父の話のとおり、ワイパーを引きずったイタチの足跡は、数十センチの幅がある用水路を華麗に飛び越えたあと（父も長靴履きの足で用水路を飛

び越えていたが、わたしも猫のように華麗にそこを飛び越え、両手をついて向こう岸へずんと着地して岸を這い上がった）、田んぼの中をずうつと横切つて、南の山のほう目指して続いていた。ときおり思いがけず深く積もっている雪に足をとられ、みずからも十センチも沈みこんだようなくつきりした足跡を残しながら、わたしはさらに続く足跡をたどった。

この日は薄曇りで、灰色の濁ったような薄い雲ごしに太陽の光がぼんやりと感じられた。空気は澄んで冷たく、呼吸のたびに肺が冷えるような気がした。イタチの足跡を無心に追いながら、わたしはこのイタチのことを考えていた。イタチというのとはもとと単独行動をする生き物で、オスは春先になれば出会ったメスと手当たり次第交わるというようなやつなのだが、それでも父の云うように、このイタチが妻を失ったイタチであるとするれば、誰かひとりの妻だけを一途に思いつめるような、おおよそイタチの本性に外れたイタチであったとするれば、そのイタチにとって、この雪に覆われた広い大地の上をただひとり寂しく駆け回らねばならぬということは、どれほどの孤独を意味することだろう。

多くのオスイタチは発情期が来てとつかえひつかえにメスと交わると、もうそれで満足してしまつて、あとのことはなにも考えない。昨日のメ

スはどうだったの、今日のメスはどうだったのといった吟味や反省とも無縁である。ところがもしもここに、イタチの中でもとりわけ変わり者のイタチ、情の深い一途な愚か者のイタチがいるとしたら、そいつが雪解けの春の野で、あのぼんやりとして眠たげな、うらかな日差しの中で、はじめて出会ったあのメスのイタチの小さな顔を、よく動くひげを、くりくりした目を、ずっと忘れずに抱きしめている、そういう大馬鹿者のイタチがいるとしたら、そいつはことあるごとにそのメスの不在と向かいあつて生きてゆく羽目になるのだ。ことあるごとにそのメスのやわらかな毛並みが想われ、そのメスの匂いが想われ、そいつを自分の巣穴へ引きこんだあの夜のことが想われるのだ。明るくなって眠りににつき、日が落ちかかつて目を覚ますと、もうそこにあのメスの姿はなかった、そのときははり裂けそうな痛切な感情をずっと抱いて生きてゆく羽目になるのだ。

わたしの息は吐き出すたびに白くあたりに放たれ、天めがけてゆるやかに昇りながら消えていった。つい先日の散歩の折、それは今日のように薄曇りの、カーテンかヴェールの向こうから光が思わせぶりにちらちらとこちらへ自分の存在を訴えかけてきて、なにかこの世界のすべてが幕に覆われた影のように思われる、あの太陽を覆っている覆いの向こうにある世界がどうしても思われる、

そういう日だったが、そのぼんやりして意地の悪いような光の戯れが、かえってわたしを自身の奥まったところにある光のようなものへと向けさせ、その光に照らされたなかでわたしは以前にもこのように雪道をひとり孤独に歩いたことがあるという、その光景をはっきりと見たのだ。それは松やブナの立ち並ぶ森の中の小道で、そのときわたしはいまのわたしよりもっと熱烈で峻厳なやり方で神を求めていた。そのわたしは神を求めのために地上の一切のものをあきらめた人であった。何世紀も前の人だったために、当時そういう人は別に珍しくなかった。その人は出家し、ひどくわびしくさみしい森の奥にある修道院へ引きこもって、祈りと労働とを伴侶として、神なるものとの交流を目指そうとしたのだった。その当時もわたしはわたし流のやり方で野心的であり、わたし流に激情型の魂のありさまをしていたが、その熱情が報われたことが本当にあったかどうか、いまひとつ確信が持てなかった。神ならば見つけた、とその人は云った。

「神ならばわたしは見つけた。そのありかをわたしは見つけたし、わたしはそれを垣間見させた。けれども、いまわたしの心に去来するこの感情はなにか。自分のすべてが神で満たされていれば、孤独はもはやないと人は云う。神を友に語れば、慰めは必定と人は云う。ところで、わたしは満た

されていなければ慰められてもない。わたしは神のために自分の一生を捧げたが、それは結局なんだったか。わたしはなにを残したのか。わたしはなにを知ったのか。わたしが知っているのはわたしの孤独だけである。わたしが見つけたのはわたしの孤独だけであった。神がいることは知っている。だがそれはわたしの孤独を、この人間的なものをついに葬り去りはしなかった。そこになにか罪があるとすれば、わたしになにか決定的な罪があるとすれば、それは神では満たされなかったわたしという人間であろう。わたしは人を避け神を求めた。わたしの神の部分は満たされたが、人の部分は奇妙な空白の中にいまとり残されている。わたしはわたし自身のこの部分のことをなにも知らないのだ。だがわたしはもう年老いた。この冬の弱々しい日差のように、わたしの生命はもはや弱くおぼつかない。わたしは自分の信念に賭け、自分の決断に賭けた。そのことを後悔はすまい。しかしわたしにはなお空白が、むなしさが、無知がある。それはわたしの限界であるか。人の限界であるか。いずれにしても、人の一生はその内部の大きさに比してあまりに短い」

そしてその人はわたしを見つめ、あのイタチの足跡を見つめて、寂しげに笑った。

それらのことを見たあと、わたしはまた無心にイタチの足跡を追いかけた。妻を求めてワイパー

を持ち去ったイタチの足跡を。おおこの感触はなんとわが妻に似ていることか、とイタチは思ったかもしれない。

「おおわが妻よ。わが妻よ」

イタチは妻をしのんで泣き、妻を想って嘆息したかもしれない。

「おおわが妻よ。わが妻よ」

イタチは妻をなつかしみ、そのごわごわしたブラシに体をこすりつけ、ああこれこそ妻の肌であった、あの暗い巣穴の中でたわむれあった妻の肌であった、その毛並みであったと思ひ出し、これをふたたびあの巣穴へもたらさねばならぬという強い衝動につき動かされた。そうだおれの巣穴には妻が必要なのだ。あの妻あってこそおれの巣穴は完全になるのだ。あの穴ぐらに妻があれば、おれのどうしようもない悲しみも孤独も癒えるのだ。

イタチは長い柄をくわえ、山の巣穴めがけて駆け出した。そのワイパーはイタチの体にはどうにも長く扱いにくかった。イタチは華麗に駆けるどころか、よろよろと一歩ずつおぼつかない足どりで歩くのが関の山だったが、しかし少しもつらくはなかった。

「おおわが妻よ。わが妻よ」

イタチは鮮烈な喜びに満ちて雪道を進んだ。雪の上に点々と足跡を残しながら、ワイパーの先が

雪をひっかくままにしながら。小さなイタチの目に、おのれの巣穴を宿した山が見えてきた。木々がすっかり葉を落として、地肌の丸見えな三角のはげ山が。

「おおわが妻よ。わが妻よ」

もうすぐ巣穴だぞ。あと少しだ。あの巣穴へ妻の肌が帰ってくる。もうすぐあの巣穴におれの妻が帰ってくる。あの巣穴の中で、ふたりでじゃれあつたあの日を、お互い疲れきってだまりこみ、ただ外を吹き回る風の音に耳をすましていたあの日を、夜の世界へふたりしてまろび出て、あたりを追いつ追われつ駆け回つたときの楽しさを、おれはまたよみがえらせるのだ。

「おおわが妻よ。わが妻よ」

山が近づき、その雪に覆われた地肌が見えてきた。と、そのときふと、妻を想い夢中になってワイパーを引きずってきたこのイタチを、はっとさせるような出来事が起きた。フクロウの低い鳴き声であつたか、リスかネズミの気配であつたか、あるいはほかのイタチの気配であつたか、それはわからぬが、そのときかのイタチははつと我に返つて、みずからの置かれた護身と捕食との支配する世界へと急速に引きもどされて、思わずワイパーの柄をぼとりと地面へ落としたものである。妻の幻影は消え去り、それにまつわる甘い思い出も感傷も消え去って、思わず身震いが出るような、

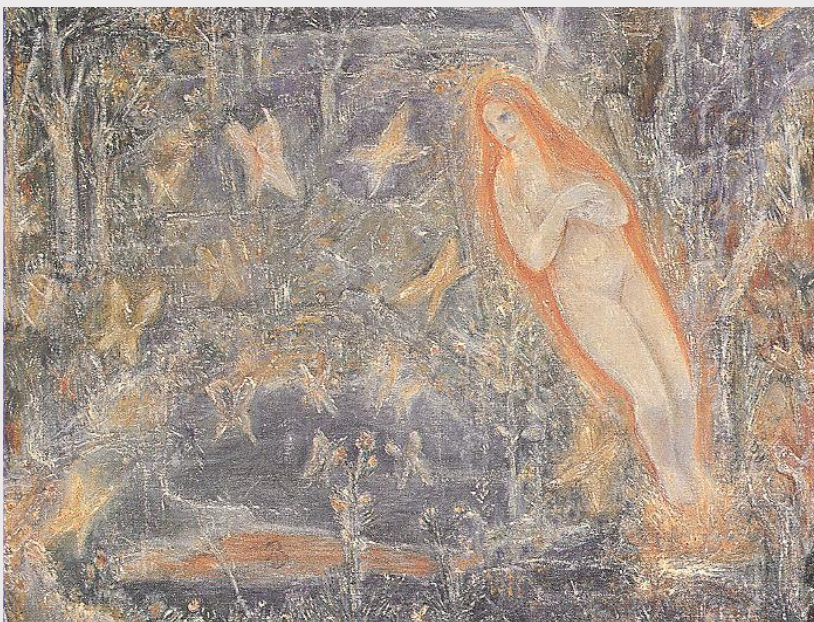
イタチの獯猛な本性がたちまちに彼を満たした。彼は思い出を忘れ去り、愛情を忘れ去って、ただあたりの気配に一心に気を配り、しきりに鼻やひげをうごめかして、おのれの置かれた立場を用心深く探りだそうとする、一匹の獣に戻っていた。

その危険か捕食の機会かが過ぎ去つたあと、彼の脳裏からはもう妻のことは完全に拭い去られていた。イタチは満足げに手足をなめ、自分が生き延びたことの喜びと安堵とに、あるいは腹がくちくちくになった満足に浸りきって、もうあのワイパーには見向きもせず、ひとりきりの孤独に満ちた暗い原野の中へと、その孤独を、存在のすべてを飲みこむ雪海の中へと、ひた走りに走っていった。

二〇二四年一月四日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



Albert Bloch : Metamorphosis